



ミラン・トゥーツォヴィッチは1965年セルビアのボジェガ市生まれ。日本では何度か小さな画廊で個展を行っている。この展覧会では、ミクストメディアの作品を22点、展示した。何れも所謂「具象的」な「人物」を描いている。

ステップスギャラリーの吉岡のブログによるとミランは「自分の周りの、「知っている」人だけを丹念に取材して作品を完成させる」という。ミランはアカデミックな肖像画家ではない。これこそ生粋の現代美術作品である。

現代美術は人間が人間を大量に殺戮する悪夢の第一次世界大戦の最中に発見された。それは国と分野を越境し、ダダ、構成主義、パウハウスに結実したが、思えば既に印象派で、その萌芽は育まれていた。

ヨーロッパにおいて暗黒の中世から産業革命の近代を経た激震の流れの中で、緩やかな曲線を描くように小さな「市民」が誕生し、中位の「大衆」が生まれ、大きな「群集」へと膨れ上がってきた。

神の権威よりも自己の尊厳を尊重するような変化は、民主主義の誕生を促すと同時に、神を失った人間は、人間が存在する意義を探るようになっていった。その時、「いま、ここ」とは何かを問うようになった。

W・ベンヤミンとG・パタイユは活動の場所がドイツとフランスと異なっていたが、交流があった。過酷な時代を大学以外の場で活躍した二人が共に重要視したのはM・ブルーストの文学であった。

ブルーストは、路上の石に対して小説の中で言及したのだった。単なる石ころの在り方に意義と価値を見出す。この姿勢が、現代美術の基盤となったことは言うまでもない。我々もまた、そこら辺に転がっている石ころに過ぎない。

世界恐慌と世界大戦を経てアメリカで活躍したJ・ジョーンズは、眼に映る身の回りの物をコラージュして作品を制作した。それは今日の画面に相当する。誰もが異なる物を見ていることが、正常なのだ。

しかし現代美術は複雑に成り過ぎた。体制に容易に洗脳される無知な大衆から生まれた現代美術の敵が、自分達となっていった。教養主義に溺れ、資本主義に飲み込まれていく。一部の特権的な人間の為の美術と化したのだ。

ミランは、そこからの回復を目指しているのではない。むしろそれ以上に自由な作品を生み出していく。ミランはアッサンブラージュを行っているのではない。本来の人間の姿への回復を求めて、身の回りの人々を描いているのだ。

